



まるいちせんおうしやちゆう

丸一仙翁社中

だいかぐらし

江戸太神楽師 (曲芸師)

せんわか

仙若 (本名:西田英智) さん (54 歳)

太神楽は、江戸時代に伊勢神宮や熱田神宮の神宮の子弟が各地に出張して獅子舞を舞い、御札を配る「代神楽」として流行。

江戸後期以降、余興である曲芸が寄席で披露されて人気を集め、現在はお正月や祭り、結婚式など、さまざまな祝いの席で披露されている。

今回は、野尻町東麓出身 (野尻中・小林高卒) の江戸太神楽師、仙若さんに話を聞いた。

2月24日には東方小学校で太神楽公演が開催され、多彩な芸や話術で全校児童を魅了。仙若さんは昨年秋の「小林市郷土芸能フェスティバル」にも出演予定だったが、新型コロナウイルスの感染拡大で中止に。今回の東方小学校の公演は、「伝統芸能を次の世代へつないでいってもらうために、地元の子どもたちに伝統芸能の素晴らしさを知ってほしい」という仙若さんの好意で、無償で開催された。

お客さんの喜ぶ姿で、苦しくても元気になれる

「日本人の感性がぎゅっと詰め込まれていて、長い時間の中で芸が洗練されている。だから人を引き付けるんだと思います」。

太神楽の魅力をそう話すのは、野尻町出身の太神楽師仙若 (西田英智) さん。

仙若さんは、20歳の頃に上京。たまたま観た舞台で、出演者が何かを表現したいと真剣に戦っているのを見て、「一緒に戦ってみたい」と舞台俳優の道へ進んだ。

転機は、平成9年の日本の伝統芸能を取り入れた舞台のヨーロッパ巡業。同じ舞台に参加していた江戸太神楽十三代家元の丸一仙翁親方の芸に魅了されたという。同時に、日本の伝統芸能への知識が足りないことに気づき、役者として太神楽を勉強しようとした稽古場に顔を出すようになった。

平成10年10月には仙若を拜命。平成14年の映画撮影

を区切りとして、太神楽師に専念することになった。

当初は太神楽だけでは生活できず、「急に太神楽の仕事が入っても休めるように、日雇いのアルバイトを続けていた」と仙若さん。

毎日アルバイト後に稽古を重ね、週末には大道芸に出演するなどして技を磨くことで、「どうしたらお客さんが喜んでくれるか肌で分かってきた」と話す。

今年で芸歴25年を迎える仙若さん。今でも本番前は緊張するというが、本番では雑念を捨ててお客さんの反応に集中するという。

「目の前のお客さんの反応を楽しんで、全部プラスのエネルギーに変えるつもりで臨んでいます」。

「お客さんの喜ぶ姿があれば、どんなに苦しくても元気になれる」と話す仙若さんは、今日も磨いた芸で観客に笑顔を届ける。

平成25年にタレントの山田隆夫さんと故郷野尻で「すまいるー旗揚げ公演」を開催。「中学校の同級生が丸一となって手伝ってくれた」と振り返る

海外公演も行うなど「太神楽には国を超えて伝わる面白さがある」と仙若さん。今後は、外国の人たちに日本で太神楽を楽しんでほしいと話す



小林 小人

こばやしびと
Vol.113